

# 特集にあたって

高 木 裕

「人文科学研究」において、研究プロジェクト「〈声〉とテキスト論」が特集を組むのは、今回で6回目となる。文学を中心に、思想、演劇、音楽、などさまざまな分野の研究成果が掲載されてきた。掲載論文の一部は、人文学部と交流提携を結んでいるボルドー第3大学との研究交流から生まれてきたものである。昨年、3月に、これまでの研究交流を踏まえ、ボルドー第3大学において、国際シンポジウムを開催した。今回の特集にあたって、この研究交流と国際シンポジウムについて簡単に御紹介をしておきたい。

二つの研究グループ（われわれの「〈声〉とテキスト論」プロジェクトとボルドー第3大学研究グループ「モデルニテ」）の研究交流は、当時、すでに『声の詩学』*Poétiques de voix* を上梓していたドミニク・ラバテ氏（ボルドー第3大学教授、「モデルニテ」代表）を、2005年、人文学部の講演会に招待するところから始まった。講演テーマは、その著書と同じ「声の詩学」であったが、2004年に誕生したばかりのわれわれの研究プロジェクトにとって、〈声〉という文学的テーマが孕む問題群を明快に示してくれるものであった。これは二つのグループの緊密な交流の出発点となった。翌年、2006年に、私自身がボルドー第3大学で、「詩のテキストと〈声〉」*Les textes poétiques et la Voix* というテーマで、ネルヴァル、ボードレール、ランボオのテキストを例に、詩的言語と〈声〉の関係について発表を行った。この機会に、「モデルニテ」グループの多くの教員と交流をすることができた。2007年に、新潟大学19世紀学会と共催で、国際シンポジウム「声とテキストとまなざしの19世紀」*XIX<sup>e</sup> siècle - la voix, le regard, les textes*. を開催し、彼らの中から、エリック・ブノワ氏（ボルドー第3大学教授）に講演を依頼した。彼の講演題目は、「声の中の空虚：ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメ」*Un vide dans la voix : Baudelaire, Verlaine, Mallarmé* であっ

た。また、翌年には同じく19世紀学会と共催で国際シンポジウム「19世紀の再評価 — 19世紀の可能性」*la Réévaluation du XIX<sup>e</sup> siècle et la modernité* を開催し、今度は、エリック・ブノワ氏とドミニク・ジャラセ氏の両教授を講演者として招いた。ブノワ氏のテーマは「19世紀フランスと現代性（モデルニテ）—— 自己評価、評価の剥奪、再評価」*19<sup>ème</sup> siècle français et modernité : auto-valorisation, dévalorisation, revalorisation*、ジャラセ氏のテーマは、「他なる複数の19世紀、諸芸術の再評価とモデルニテに関する議論」*Les autres XIX<sup>e</sup> siècle. Réévaluation des arts et débat sur la modernité* であった。このようにして、研究の交流は多くの成果をもたらしたが、この交流の自然な流れから、昨年3月に、ボルドー第3大学における国際シンポジウムの開催にたどり着いた。

このシンポジウムのテーマは「声とモデルニテ」というもので、まさに二つの研究グループの名称を象徴するものであった。3月15日（月）、16日（火）の両日にわたり、近代（モデルニテ）を大きな転換点ととらえ、〈声〉がテキスト生成に果たす役割がどのように変容し、そのことがまた文学表現にどのような変化をもたらしたかを検証するものであった。二日間の発表・討議を通して、どの発表にも共通していたことは、〈声〉とエクリチュールの関係が「近代」*modernité* の前後でいかに変容したかという通時的问题、つまり、19世紀を〈声〉の文化の分水嶺として捉える視点ではなく、*modernité* の語を（ボードレールの美学概念を思い起こすまでもなく）「現代性」を強烈に意識する「いま・ここで」の時間意識とそれが生み出す革新性を指し示すものとして理解していたということである。発表者の対象とする作家、詩人の顔ぶれを見れば、当然と言えば当然の問題意識であった。〈声〉がテキスト生成に果たす役割を考える上で、「主体」の問題は避けて通れない問題であるが、ドミニク・ラバテ氏は、シンポジウムのイントロダクションをなす見事な発表の中で、「主体」概念から盛りこぼれる「声」の概念についてふれ、「声」を「人称的なものと非人称的なものの一種の *partage*（分割/分有）」のようなものとして呈示した。この *partage*（分割/分有）の経験は、ときには、ひび割れた声へと、またあるときは得体の知れない声の経験へとわれわれを導くものであるが、今回のシンポジウムの発表の多くが示したとおり、この「未知の」声の経験は、近代的な自我の意識の

奥底に映し出される *altérité* 「他性」を浮き彫りにするものである。この「他性」の意識は、ディスカールの危機やディスカールの錯綜を示しながらも、往々にして新鮮で革新的なエクリチュールの中に刻み込まれることになる。今回の発表について言えば、このような例は、ブルトンがその『宣言』の中で言及したシュールレアリスムの系譜上の作家・詩人（ネルヴァル、ユーゴー、マラルメ、ランボー、ロートレアモン）のみならず、すでにディドロにおいて、さらには、ラフォルグ、ドストエフスキーにおいても見いだすことができる。その一方では、まったく斬新なエクリチュールへの意識が、新しい〈声〉を生み出し続けること、文学の *modernité* は、それが大伴家持の時代であろうと、19世紀であろうと、〈声〉とエクリチュールの親密であると同時に闘ぎ合いの関係から由来するものであることも確認できた。「主体」から溢れ出る〈声〉は、いつもエクリチュールの〈新しい〉器を必要とする。また、エクリチュールの革新は、新しい〈声〉を必要とするとも言える。〈声〉とエクリチュールの関係については、さらに今後、研究交流を通して、課題を深めてゆきたいと考えている。

このプロジェクト特集に掲載される論文について簡単にふれて、摺筆する。上述したボルドー第3大学におけるシンポジウムの記念講演と呼ぶべきラバテ氏の発表原稿の翻訳（「ドミニク・ラバテ「声の分割」）が、逸見龍生氏の翻訳で掲載されている。鈴木孝庸氏は、論文「声の伝承・声の記号化 — 『平家吟譜』から『平家正節』へ —」において、声として伝承された平曲を、いかに視覚的な符号として表示したのかという点について、主に二つの譜本を検討することで苦心の跡を探り、「口伝」と「文字伝承」との関わりを考察している。高橋正平氏の論文「スパーストウの火薬陰謀事件説教とピューリタン革命」は、1605年11月5日にジェームズ一世暗殺を図った火薬陰謀事件記念説教を扱い、説教家スパーストウの声を説教＝テキストから解説するもので、スパーストウは事件を論ずることに関心はなく、彼はむしろ説教の行われた1644年11月5日現在進行中のピューリタン革命により関心があったこと、テキストをよく読むとピューリタン革命に関する表現が頻出し、彼の説教は結局はピューリタンを支援する目的で行われたことを明らかにしたものである。